

海幹校戦略研究

第1巻第1号

巻頭言

「海幹校戦略研究」発刊にあたって

海上自衛隊の幹部自衛官を対象とした刊行物としては、昭和30年3月に発行された「幹校レファレンス」以降、公的機関誌であった「海幹校評論」を経て、現在では兵術同好会が発行する「波濤」がある。これらの刊行物は主として読者の軍事及び一般素養の向上に貢献してきた。現在の「波濤」は完全な私的定期刊行物であり、海上自衛官以外にも広く読者、筆者を得て、その記載内容も私的出版の特性を生かし、読者のニーズに応えた柔軟かつ幅広いものとなっており、その目的を達している。

しかし、「波濤」と幹部学校のシンクタンクとしての活動との関連は、当然のことながら極めて薄くなってきていると言わざるを得ない。スポンサーである読者のニーズと研究所要の不一致、紙幅の制限（分割掲載）、会員による掲載希望投稿増、私的行為としての執筆による各種制限等がその理由にあげられるであろう。平成22年度1年間の本校職員による記事は全体の約16%に過ぎない。

一方、昨年度発表された22防衛計画の大綱においては、人的資源の有効な活用として「安全保障問題に関する研究・教育を推進し、同問題に係る知的基盤を充実・強化する」ことが示された。本校もこの方針を実現する責にあるが、以前から、「知のスパイラルの上昇」というコンセプトで同問題には取り組んできていた。この取り組みは、本校がシンクタンクとして機能するために必要な「知の創造」及び「知の蓄積」を行い、さらに部内外との交流を通じた「知の発信」による充実を経て、次の「創造」につなげていこうという試みである。プロの学者ではない自衛官の能力には極めて制限があるものの、現場における経験と諸外国海軍との関係という強みを生かし、外部の知恵を得るための土台と場所を提供するとともに、成果を共有して次のステップに進むという活動を繰り返すことにより、安全保障の研究・教育に、より高いレベルで寄与していくことがその意図するところである。「発信」の場としては Web、シンポジウ

ム等も有効であり、既に活用もしているところであるが、特に部外とのアカデミックな交流の強化には刊行物による発信が有効かつ不可欠であることが、これまでの活動を通じ認識されるに至った。このように本誌の創刊は 22 大綱発表と直接関連はしていないが、共通の情勢認識を有した結果であり、目指すところが一致したのは偶然ではないと考える。

さて本号は、「知のスパイラル」の起点であり、最初から高い水準は望めないにせよ、他者にとって価値がないものであれば土台にもならないという認識で有志職員が研究にあたった成果である。バックグラウンドは様々な筆者が、それぞれ「知のスパイラル」において「呼び水」となるべく、経験を生かしつつも、その中に閉じこもることなく「蛮勇をふるって」発表するものである。読者の方々には本誌に触れられたことを機に、本校の活動に興味を持っていたき、本校主催研究会等への参加、意見の送付等を強く希望したい。本誌は一部の部隊にも配布するが、部隊においても発刊目的を理解いただき、部外との意見交換の材料に活用してもらえれば幸いである。

(高島 辰彦)